



シンガポールで過ごした3年間

美唄市立東中学校 教諭 眞田 眞

(前勤務 シンガポール日本人学校 小学部 クレメンティ校)



1. シンガポールの概要

<位置・面積・人口> シンガポールはマレー半島の南、北緯1度17分、東経103度51分、赤道から137kmに位置する本島と周辺の59の島より構成されている。面積は685.4km²、淡路島または東京23区とほぼ同じ広さである。

人口は約473万人、国土が狭い分人口密度は約6500人/km²と高い。

<気候> 熱帯雨林気候に属し、年平均気温は27℃前後、季節の変化はほとんどないが、雨季と乾季がある。年間を通じて降水量が多く、2000mmを越える。3年も過ごすと同様に気温と湿度にも慣れ、雨季の朝方に25℃を下回ると肌寒ささえ感じるようになる。湿度は1年中高く、乾燥肌やアトピーを持っている人にとっては最高の環境である(息子のアトピーは渡星2週間で完治した) 時折見られるスコールは激しく、それに伴う雷も強烈である。

ゴルフ場などでは落雷による死者が出ることもあり、学校近くに落ちるとよくプレーカーが落ちた。雷のエピソードとして有名なのは、「マーライオン」の頭に落雷したことである。そのときの新聞には「マーライオンが人々を救った」という見出しが出て話題になった。



<言語> シンガポールは多民族国家であり、その割合は中国系75%、マレー系14%、インド系9%、その他2%となっている。公用語は中国語・マレー語・タミール語・英語が使われており、テレビ放送や表示もそれぞれの言語で表されている。共通語としては英語が用いられている。シンガポールでは二カ国語教育を行っており、第一言語として英語に力を入れている(もう一つは民族としての母国語)。近年では

小学校段階から第三外国語を取り入れるところが現れ、日本語を学んでいる小学生もいる。シンガポールで話される英語は独特のアクセントを持っており、よくシングリッシュ(Singlish)と呼ばれている。これは現地のマレー語や中国語が混じった英語であり、語尾に「ラー」がついたり、発音が独特だったりしている。

<宗教> 宗教は仏教・イスラム教・ヒンズー教・キリスト教など世界の主だったものがあり、市内にはそれぞれの宗教の寺院やモスク・教会等が見られる。シンガポールは多民族国家ゆえ、日常生活の中で異民族・異教徒同士が相手の生活様式や考え方を相互に理解・尊重しながら生活している。勤務していた日本人学校には多くのローカルスタッフが働いていたが、当然のごとくその人の民族的行事や風習を尊重している。

<政治> 人民行動党の事実上の一党独裁制である。現在の首相はリー・シェンロン。初代首相リー・クワンユーの息子である。シンガポール建国44年の歴史の中で首相を務めたのは3



リー・クワンユー

人だけであり、政治的に安定しているともいえるが、独裁国家であるともいえる。例を挙げれば、言論に関しては大きく制限され、投獄や国外追放などの弾圧もある。日本人といえども公共の場所で政府に対して批判等を言った場合、強制送還されることもあり得る。そういったことを取り締まる私服警官も存在するようである。また、野党が当選した地域については公共工事が遅れたり、徴税面で仕打ちを受けるなど、具体的な報復などもある。

しかし、このような独裁体制において、国民の不満の声が聞こえてこないのは、一つに政治的な力によって経済発展を遂げている事実である。現在のシンガポールの豊かさは政治のおかげであることを誰もが認識しており、特に初代

首相リー・クワンユーは今でも多くの国民から慕われている。また、多民族国家ゆえ各民族に対する配慮もある。実質、シンガポールを動かしているのは中国系（首相は3代とも中国系、大臣も中国系が多い）であるが、様々な民族の文化や行事を大切にし、それに合わせ祝日をもうけたりしている。また、シンガポールには大統領（政治的に大きな力はない）が存在するが、これについては、中国系以外の人物が就任している。（上はナザン大統領。インド系民族）



～シンガポールの祝日～

- ・ New Year's Day（元旦）
- ・ Hari Raya Haji（イスラム教）
- ・ Chinese New Year（中国の旧正月）
- ・ Good Friday（キリスト教）
- ・ Labour Day（メーデー）
- ・ Vesak Day（仏教）
- ・ National Day（建国記念日）
- ・ Deepavali（ヒンズー教）
- ・ Hari Raya Puasa（イスラム教）
- ・ Christmas（キリスト教）

<歴史> かつてのシンガポールは「テマセク」と呼ばれていた。その後、周辺のスマトラ・マレーシア・ジャワなどの諸王朝の興亡に伴い、その都度支配下に置かれ影響を強く受けていた。14世紀末頃に「テマセク」が「シンガプーラ」＝‘獅子の町’と呼ばれるようになった。16～18世紀には、西欧諸国による植民地化が始まり、1819年、イギリス人のスタンフォード・ラッフルズがシンガポールに上陸し、翌年シンガポールの自由港宣言を発表し貿易港としての発展の基礎を築いた。その後、シンガポールはイギリスの植民地となり中継貿易地として繁栄した。その間、中国人やインド人、アラブ人、ヨーロッパ人など多民族の住む地となっていた。なお、日本人がシンガポールに移り住むようになったのは明治時代からで、1879年に日本領事館が開設された。大正時代には「リトルジャパン」という日本人街に百軒以上の日本人



スタンフォードラッフルズ

商店があり、大正元年（1912年）には日本人小学校が開校したが1945年に一旦閉校となった。第二次世界大戦中、シンガポールはイギリス軍と日本軍の激しい戦場になり、多くの犠牲者を出した。1942年イギリス軍が降伏し、シンガポールは日本軍の占領地となり、「昭南島」と改称された。第二次世界大戦後の1945年、シンガポールは再びイギリスの植民地となるが、1957年イギリス連邦の一員として自治権を獲得し独立。その後、マレーシア連邦に加入するが、1965年8月9日にシンガポール共和国として分離独立をした。分離独立後、政府は外国企業の誘致による工業化の推進を図りながら、同時に中継貿易港としての国際性を生かし、アジアにおける国際金融都市として発展した。

2. シンガポール日本人学校

<概要> 1912年に補習校として開設され、第2次世界大戦を機に一時閉鎖、1964年に補習校として再開し、1966年9月3日シンガポール政府より認可され日本人学校となる。開校当初は教員3名、児童数27名であった。1968年児童数増加により学校を移転、中学部の補習授業が開始される。1970年に中学部開設、1971年中学部移転、1996年クレメンティ校の一部をチャンギ校に移転、1998年チャンギ校完全移転（小学部の学区制ができる）、これにより中学部1校、小学部2校体制が始まり、現在に至る。現在の児童生徒数は約1700名、バンコク、上海に次ぐ世界第3位の日本人学校となっている。設置者はシンガポール日本人会、学校運営理事会が管理運営を行っている。

<教育の特色> シンガポール日本人学校では「豊かな国際感覚をもち、世界の人々とつながろうとする人材の育成」を教育目標に次の5つを実践の柱としている。

- (1) 「生きる力」を育むための基礎基本の徹底
- (2) 英語教育の重視
- (3) 現地理解教育と交流教育の推進
- (4) IT教育の充実
- (5) 家庭・地域との連携

ここでは、シンガポール日本人学校の特色として、上記の(2)英語教育の充実、(3)現地理解教育と交流教育の推進について紹介したい。

◎英語教育の重視

2009年度、シンガポール日本人学校小学部の英語教育の概要は以下の通りである。

<英会話年間時数>

1～2年 160時間、3～6年 120時間

※1～2年はフォニックスを含む

※5～6年は英文法を含む

<指導者>

シンガポール在住の英語を母語とする講師

<学習形態>

学年を習熟度別12グループに分けて実施

<イマージョン教育>

全学年の水泳、1～3年の音楽、5～6年の
図工において、英語を母語とする講師が授業
を行う。



英会話スタッフ



イマージョンスタッフ



イマージョン水泳の授業



イマージョン音楽の授業

2011年度に完全導入される「外国語活動」
については2010年に移行措置として導入され
る。導入にあたり、内容は学習指導要領の目標
に沿う中で、シンガポールとしての地域素材が
活用されるように工夫している。



◎現地理解教育と交流教育の推進

小学部クレメンティ校では現地理解教育の一
環として、1～2年では生活科、3～6年では総
合的な学習において現地の小学校と交流してい
る。2009年度は残念ながら新型インフルエン
ザの影響により中止となった学年もあった。

1～3年 チーフアー小学校

4～5年 ヘンリーパーク小学校

6年 NUS（シンガポール国立大学）

また、学校交流の他、5～6年の希望者を対
象（20名程度）にホームステイプログラムを
実施している。

前述の学校につい
ては、15年以上前か
ら交流を続けている
が、2009年度にシン
ガポール教育省から



各小学校へ他国との交流を推進するよう通達が
あり、多くの学校から日本人学校への学校交流
申し込みがあった。現在では前述の交流の他、
ジュロン小学校の児童20名がクレメンティ校
の授業や行事に参加したり、児童と文通をする
などの交流を行っている。また、6学年の修
学旅行ではマレーシア
の小学校との交流を20
09年度から始めている。



3. シンガポールの教育事情

<シンガポールの教育政策>

シンガポールでは2003年より義務教育制度
が導入された。国際教育到達度評価学会（IEA）
の「国際数学・理科教育動向調査」において1
995年から世界のトップを走ってきた国とし
ては意外な事実である。しかし、実際には義務
教育制度が導入される以前から初等学校におけ
る授業料は無償であり、保護者はわずかな諸雑
費を負担するだけであった。つまりシンガポー
ルは義務化がされていなくとも、誰もが教育を
受けられる環境が整備されていたことになる。
さらに就学率・識字率が90%以上と高い教育
水準で保たれている背景には、国が教育を受け
ればよい仕事につけるといふ社会のシステムを

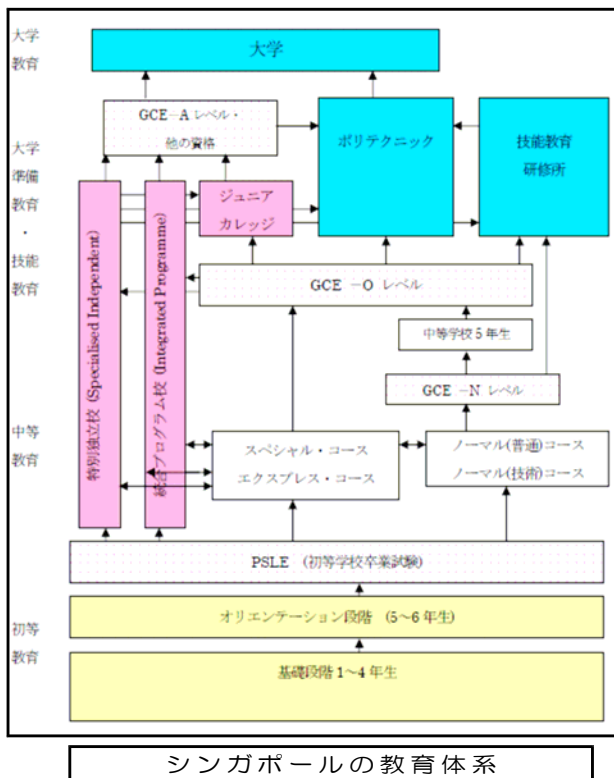
作り上げていることがあげられる。

シンガポール教育省のホームページを見ると、国家としてのシンガポールが行う教育のねらいを「Thinking Schools, Learning Nation」というスローガンで表している。具体的に目指す成果については、目標を二元化し、公教育が期待する人間像を「大衆」と「リーダー」に大別している。資源を持たないシンガポールは、世界の市場競争に生き残るために「人的資源」を重要視している。つまり国にとって、強力なリーダーと質の高い労働力が生命線であり、20年以上も前から人材開発を国家の重要戦略として位置づけている。学校教育や職業訓練を通して基礎学力や職業能力の向上に取り組んでおり、当然、教育に関わる予算は大きくなっている。教育費を含む人材開発費は、実に国家予算全体のおよそ20%が当てられている。

＜シンガポールの教育体系＞

シンガポールの教育体系における一般的な進路は初等教育6年、中等教育4～5年、大学準備教育2年、大学3～4年であるが、中等教育から専門教育3年というコースもある。

日本と大きく違う点としてあげられるのは「初等教育」である。4学年修了時に、学校が独自に作成したテストが行われ学力の選別が行われる。その後、初等教育卒業時にPSLEとよばれる卒業試験を受け、この試験により中等



教育へ進むコースが決められる（パスしなければ中等教育に進むことはできない）

シンガポールでは初等教育までが義務教育であるが、中等教育の段階ではっきりとした学力の選別が行われる。特筆すべきはPSLEの上位10%については、スペシャルコースと呼ばれるコースに進めることである。シンガポールでは国の政策としてこのような英才教育を取り入れている。

中等教育以降も試験は続くが、日本のような入試は行われない。Nレベル、Oレベル、Aレベルとよばれる認定試験を受け、その成績によって卒業後の進学先が決まる。

＜教育環境から生まれる学習への意識＞

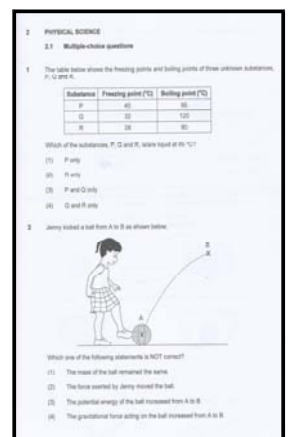
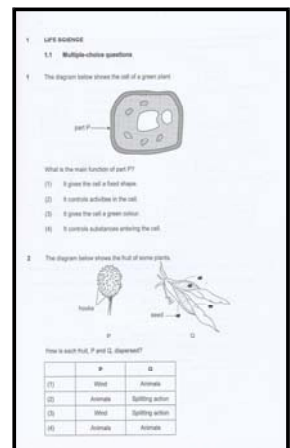
前述の通り、シンガポールではエリートを選抜・養成を重点に置いている感がある。シンガポールは物質的な資源が乏しい国であるので、人的資源の育成に重点を置いている。国民もそのことを十分理解しており、教育に対する関心は非常に高い。よりレベルの高い学校に進むことが将来の自分につながると考えており、それがそのまま学習動機につながっていることが多い。

＜初等学校修了試験 (PSLE) ＞

前述の通り、シンガポールでは小学校から中等学校への進学をする場合、PSLEといわれる試験（初等学校修了試験）を受ける。この試験の結果により、進学の可否はもちろんのこと、中等学校でのコース分けが決定される。

この試験は子どもの進路決定に大きな影響を及ぼすのはいうまでもない。2000年の統計によると資格取得率は95.8%であった。

右の資料は2004年から2008年のPSLE（理科）の過去問題の一部である。この問題集は市販されており(S\$2)大



抵の書店に置かれている。問題は「LIFE science (生物)」「PHYSICAL science (物理)」に分かれており、日本の小学校と比較するとレベルは高い。

<現地校訪問から感じたこと>

任期中は「シンガポールの理科教育について」を研修テーマとし、実地調査としていくつかの学校を訪問した。

○ヘンリーパーク小学校訪問 (2007年8月)

2007年8月にヘンリーパーク小学校へ視察に行った。直接、理科の授業を見ることはできなかったが、理科室などの施設を見せていただいた。理科室の中に入ったとき、雰囲気としては中学校の技術科室に似ているように感じた。また、めずらしく思えたのがディスプレイである。右の写真は数あるディスプレイの中の1つであるが、中には力学台車・パチンコ・ミニカーなどが入っている。おそらく力学関係の用具と思われるが、これが実験器具としてよりもオブジェのような意味合いで置かれていた(飾られていた?) 実際に利用するものかもしれないが、日本の実験器具とは違い色彩も鮮やかで玩具のような印象を受けた。



○チーフター小学校訪問 (2008年8月)

前年のヘンリーパーク小では、理科教育にかかわる施設設備及び教材を中心に見学したが、今回は理科に対する児童の意識について調査してみた。無作為に抽出した児童8名に「理科は好きか?」「その理由は?」と尋ねてみたところ7名の児童は「好き」と答え、主な理由としては「おもしろい」とのことであった。なお、「嫌い」と答えた1名の児童の理由は「わからない」であった(内容がわからないのか、嫌いな理由がわからないのかは不明)

シンガポールの児童・生徒は理科という学習を「好き」と答える割合が多い。日本の児童にも理科を「好き」と答える児童はいるが、主な理由のひとつとしてあげられるのは「実験」である。ところが前述の通りシンガポールではほとんど実験が行われない。一度だけ、実験を行った授業を見学したが、既習事項の確かめとし



て行われていただけだった。シンガポールでは実験の役割はこれが一般的であるとのことであった。シンガポールの児童は理科を好きになる理由として「実験」はあてはまらないようである。このことは注目する点である。実験は授業の中で子どもたちの意欲喚起を促し、視覚的にもわかりやすく理解が得られ、また思考を発展させる効果がある。日本で理科教師をやっている以上、実験を行わない授業は翼をмоがれた鳥に等しい。それでもシンガポールの子どもたちが理科を「おもしろい」と答える理由は、おそらく自分の生活に理科が直結していると感じているからではないだろうか。国際数学・理科教育動向調査の中でも「理科を勉強すると日常生活に役立つ」と答えたシンガポールの児童生徒は89%(日本は53%)になると書かれてあった。しかし、理科を「おもしろい」と感じている子どもが多いものの、教科書やテストの問題を見る限り、科学的な思考を伸ばすような指導内容はあまり見当たらない。シンガポールの児童生徒にとって、理科は「覚える」教科なのである。

○ジュニアカレッジの学生の意識 (2009年8月)

ジュニアカレッジに通う学生に、シンガポールの理科教育について話を聞いた。(彼が日本語スピーチコンテストに参加したとき、ボランティアとして私がチューターを務め、それ以来、家族ぐるみにつきあいをしている)彼はどちらかといえば理科は好きな方ではないとのことであるが、友人はどちらかといえば理科に興味関心がある人が多いようだ。



ジュニアカレッジでも授業ではあまり実験は行わず、レポートの提出やプレゼンテーション等が多いとのことであった。

○シンガポールの教育から感じること

シンガポールの高学力の背景は単純に言えば「つめこみ教育」である。そしてその背景には教育政策から生み出された学歴社会がある。シンガポールの子どもたちの学習動機は認定試験でいかに良い成績を残すかにある。その結果、国際動向調査のようなテストでの好成績につながるが、それはテストのための学力のように思われる。建国から40数年の若い国とはいえ、世界第1位の学力を有しながらも、自国で開発したものや科学分野における著名人をいまだ輩出していないシンガポール。車や建物などほとんど自国製品を持たず、オリンピック選手でさえ帰化選手で構成している国である。人材開発に重点を置き国家的に取り組んできた結果が、自由な発想や開発する力を奪ってしまったように思えてならない。世界第1位の学力は必ずしも国を豊かにするものではないのだ。シンガポールを通して日本の理科教育を見れば、問題解決能力や科学的な見方・考え方の育成を目指すその方向が絶対に間違いではないことを確信する。そのためにも我々は日本の現状を把握し、日々の研鑽を積み重ねなければならない。シンガポールでは最近になってエリートの選抜・養成だけではなく、スポーツや芸術など特定の分野に秀でた能力を持つ子どもたちのための学校づくりをはじめ育成している。これからもシンガポールの教育に注目していきたい。

4. シンガポールで過ごした3年間

シンガポールで過ごした3年間の中で、様々な「出会い」があった。一つは異文化との出会いである。住んできた環境、宗教、慣習によって異なる価値観（シンガポールでは自分が異なっているのだが…）

異なるものを認めることの難しさ、そして大切さを学んだ。

また、異文化との出会いは、改めて日本の文化を見直すこ



とにもつながった。現地の方と交流をすれば必ず聞かれるのは「日本のこと」。考えてみれば自分もその人のその国のことを必ず尋ねている。「豊かな国際性」を身につけることは、日本の文化を自分の言葉で語れることに他ならない。私は他国の文化に興味を持つと同時に、より一層、日本の文化を学んでみたくなった。

「出会い」のもう一つはやはり人である。日本全国から集まった教師たち、現地に住んでいるシンガポリアン、日本人。特に民間企業の方たちとたくさんお話しできたことは大いに勉強になった。「マネジメント」や「利益を出す」という考えを良い意味で教育の世界に取り入れることは有益であると感じた。

そして、日本人学校の子どもたちとの出会いも大きかった。北海道の子どもにはひとりも出会わなかったが（北海道の子は自分の息子一人）、同じ日本の子どもとして何ら違和感を感じることはなかった。私たちが相手をするのは「空知の子ども」でもなく「北海道の子ども」でもなく「日本の子ども」であることを強く認識させられた。私たち教師は「日本人」を育てているのだ。

シンガポールは今日も暑いはずである。帰国してはや6ヶ月。今ではあの暑さが懐かしい。不思議なもので、本当に自分が3年もの間海外に住んでいたのか、現実感があまりない。しかし身につけてきた感覚や学んだことは確かに覚えている。今はそれを今後はどう生かしていくか、考える毎日である。